

1 言語	言葉の力をつけよう（音読3年④） 「日本文学の代表作『源氏物語』」	名前
---------	--------------------------------------	----

★ 日本文学を代表する作品の一つに挙げられるのが紫式部が書いた「源氏物語」です。
作り物語の流れと歌物語の流れが一つになった長編物語です。

やってみよう

◆ この章段は、主人公「光源氏」の親の代から子や孫の代まで続く壮大な「源氏物語」の冒頭部分です。味わって読んでみましょう。

《解説》

特に高い身分ではない桐壺の更衣が帝の寵愛（身分の高い人からかわいがられること）を一身に受け、他の女御・更衣たちのねたみを買ってしまいます。そのためでしょうか病気がちになって里下がり（実家に帰ること）をすることが多くなりましたが、そんな様子の桐壺の更衣を帝はますます寵愛し、やがて美しい皇子（光源氏）が誕生します。

いづれの御時にか、女御、更衣あまたさぶらひたまひける中に、

いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めきたまふありけり。

初めよりわれはと思ひ上がりたまへる御方々、めざましきものにお

としめそねみたまふ。同じほど、それより下臈の更衣たちは、まし

て安からず。朝夕の宮仕えにつけても、人の心をのみ動かし、恨み

を負ふつもりにやありけん、いとあつしくなりゆき、もの心細げに

里がちなるを、いよいよ飽かずあはれるものに思ほして、人のそ

しりをもえはばからせたまはず、世のためしにもなりぬべき御もて

なしなり。上達部、上人などもあひなく目をそばめつつ、いとまば

ゆき人の御おぼえなり。唐土にも、かかることの起こりにこそ、世

も乱れあしかりけれど、やうやう天の下にもあぢきなう人のもて悩

みぐさになりて、楊貴妃のためしも引きいでつべくなりゆくに、い

とはしたなきこと多かれど、かたじけなき御心ばへのたぐひなきを

頼みにて交じらひたまふ。（後略）

《読んだ回数》

合計回

何度も

5回

4回

3回

2回

1回



読めたら色をぬろう!

